

東日本大震災
あの日を未来につなぐ、宮城のいま。

2020.9.11

Vol.
52
September, 2020

ナウイズ
毎月11日発行

NOW IS.



in
南三陸

ワ
ツ
キー
貝山



被災地には、まだまだ
すごい取組がたくさんある。

NOW IS. 対談 Talk Session

in 南三陸
MINAMISANRIKU

まちのみんなで育む。 震災を機に生まれた 新しい「資源」の考え方。

町に根付き始めた
資源循環の意識。

ワッキー貝山さん(以下、貝山)

1生ごみから、電気が作れるんですか！小さいころ、生ごみは腐らせて堆肥にしていました。

野添幹雄さん(以下、野添)

それも資源の循環のひとつですよ。私たちアマタ株式会社の「南三陸BO」では、南三陸町の各家庭やお店などから集めた生ごみや余剰汚泥を、この施設で発酵させて「エネルギー」と「液肥」をつくっています。これは、

魚がおいしい港町で、最近はお光業も盛ん。そんな印象が強い南三陸町ですが、震災後、世界的にも珍しい取組が行われているんです。それが「南三陸町バイオマス産業都市構想」。「森里海ひとのちめぐるまち南三陸」と銘打って、暮らしの中で、資源が循環し、人と人がつながるまちを目指しています。この日、ワッキー貝山さんと訪れた「南三陸BO」は、この取組の旗振り役。家庭やお店から出た生ごみなどを回収し、エネルギーと液肥をつくる取組を進めています。

のぞみ
みきお

Nozoe Mikio 野添幹雄

PROFILE

京都府出身。2016年アマタグループ合流(入社)。持続可能な地域づくりに向け、小学生を対象にした資源循環教育講師や南三陸町での実証実験・調査等を担当。2020年より同町に常駐し、志津川高校との連携授業をはじめ同町での地域循環システムの実現と他地域への展開に取り組む。

わっきー
かやま

Wacky Kaiyama ワッキー貝山

PROFILE

1970年仙台生まれ。吉本興業を経て、フリータレントとして独立し、TV、ラジオ、イベントなど宮城県を基盤にマルチに活動中。ガチャガチャ収集家としても知られ、今年「ガチャ愛100%ワッキーが贈る 昭和レトロガチャ 最強コレクション」(グラフィック社)を出版。

震災後「人と環境にやさしく、災害に強いまちづくりをしよう」とスタートした「南三陸町バイオマス産業都市構想」の一環です。貝山「どうしてこういう取組が始まったんですか？」野添「単純な復旧ではなく、震災の経験を経て、子どもたちに残したいもの、豊かさとは何か。町の方々と話し合い、未来像を描いていきました。町の中で資源を循環させ、自然と共生し、非常時のエネルギーも確保する。持続可能な町のモデルを、ここで創りたいと考えています。

貝山「すごい構想だなあ。今はどれくらいのエネルギーを生産しているんですか？」野添「2015年10月から南三陸町全域で生ごみの分別回収が始まり、現在は10軒に1軒の民家に生ごみ回収用のバケツを設置しています。量でいうと、家庭や事業所からは年338トン、余剰汚泥は年1,494トンです。この生ごみの量で発電できるエネルギーは、家庭でいうと年約18・6世帯分。液肥は田畑年420反に撒ける量が生産できます。

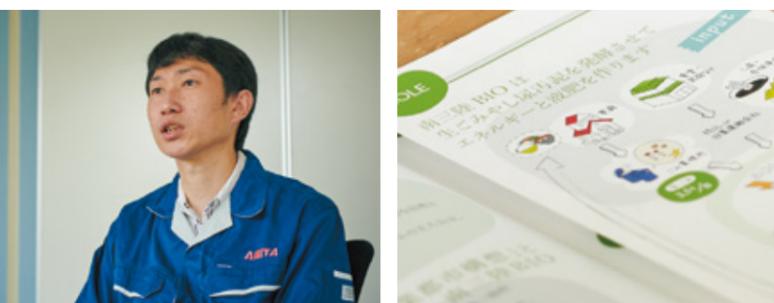
貝山「未来を感じる！アマタ株式会社は、もともと関西の企業なんですか？」野添「はい、創業は姫路で、今の本社は京都です。3・11の時は東京が本場で、東日本と阪神・淡路、2つの震災を経験したこともあり、他人事ではないという想いが強く、震災後すぐ、ボランティアとして南三陸町に入ったんです。その時、この町の未来づくりに本気で関わりたいと考え、まだ事業もない中で、震災の約1年後に支社を開設しました。

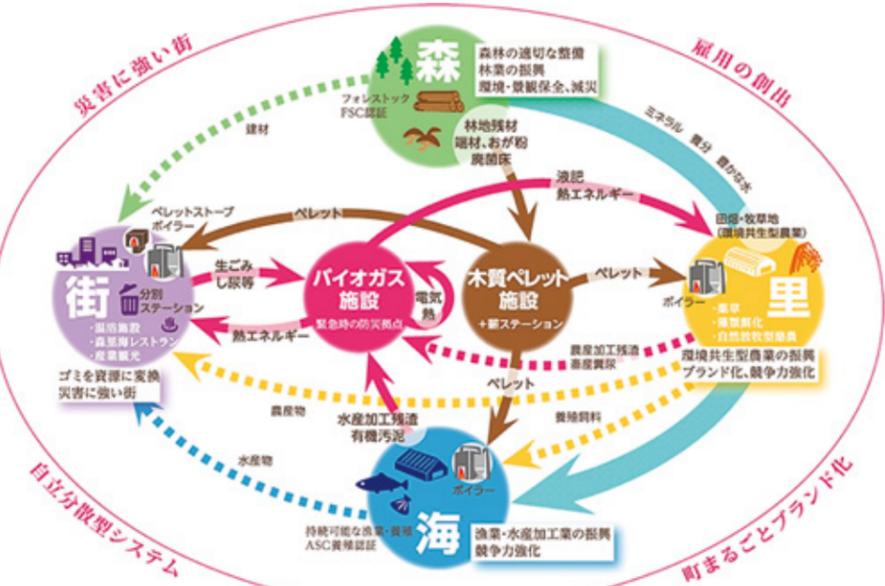
貝山「1年後といったら、まだ右も左も分からない時期じゃないですか！それだけ強いが強かったということですね。同じ震災を経験していたり、真っ先にボランティアに入ったり、そういう気持ちで地元の人にも通じますよね。共感を得られる。野添「そうかもしれない。私たちの活動が、コミュニティにもつながっているんだと感じることも多くあります。ごみ出しは、生活に絶対必要な作業なので、自然とみんなが集まって、おしゃべりしていくんです。資

源だけでなく、人の関係性もつながっていく。貝山「確かに。震災後、高齢者が引きこもることは大きな課題になった。資源の循環という観点で始めたことが、まちづくりにつながっているのは面白いなあ。こういう取組に参加できると、町に誇りを持てる、というのもあるでしょうね。東北人は「おしよしい」(恥ずかしい)から大きな声では言わないけど、やっぱり地元が好き。うちの地元いいでしょって思えることは、どんどんやりたいと思うんでしょうね！



「いのちめぐるまち」を
南三陸の皆さんと実現したい。





「南三陸町バイオマス産業都市構想」のイメージ図。それぞれの場所で地元企業が頑張っています。 出典：南三陸町バイオマス産業都市構想

「生ごみのリサイクルも、木材を燃料として使うことも、もともとは昔からやってきたことですよ。今日訪問した2つは、そういう地元の良さを見直して、新しいものにチェンジしている。ぼくが震災後南三陸に通っていたのは、まだ米軍が炊き出しをしているような時だった。あの時はまだよちよち歩きだっ

地元のいいもの 再発見し、育てる。

南三陸町と合同会社MMRの訪問を終え、ワッキーさんは「新しいものって、いつも足元にあるんだよね」と言います。「生ごみのリサイクルも、木材を燃料として使うことも、もともとは昔からやってきたことですよ。今日訪問した2つは、そういう地元の良さを見直して、新しいものにチェンジしている。ぼくが震災後南三陸に通っていたのは、まだ米軍が炊き出しをしているような時だった。あの時はまだよちよち歩きだっ



化石のガチャガチャの前で、中村悦子店長と。

※1 ASC (Aquaculture Stewardship Council): 水産養殖管理協議会。環境に負担をかけず地域社会に配慮して採獲している養殖業に対する国際的な認証制度。
 ※2 FSC (Forest Stewardship Council): 森林管理協議会。適切な管理がなされた森林と、そこから切り出される木材に認証(証明)を発行し、ラベルをつけることで、消費者に地球環境に配慮した木材を選んでもらう機会を提供する制度。

ここに注目!
NOW IS. EYE'S

南三陸さんさん商店街の中にある「さんさん市場」では、南三陸を中心に地域の魚介やスイーツ、雑貨などを販売しています。店頭のポップや地元の方との会話で温かさを感じられるお店です。

合同会社MMRの本拠地は、シェアオフィスにもなっています。

「山は決して津波で全壊しない。有事のとき、南三陸の財産になる場所なんです」と話すのは、林業を営む佐藤太一さん。

「南三陸町の77%は山。エネルギーを自給することを考えたとき、山はポテンシャルが高いんです。木質ペレットはペレットストーブがあれば、とても使いやすい燃料です。灯油ストーブに置き換える気持ちで、その良さを勧めていきたいと思っています。木質ペレットのストーブを扱ったことがあるというワッキーさん

んは、何度も頷きます。「木質ペレット、いいんですよね。なんとなく火がやわらかい感じがする。ペレットストーブを趣味やインテリアとして使う人には何度か会ったことがあるけど、南三陸では、何かあったときの保険として木質ペレットの普及に取り組んでいるんですね。保育所や病院など、ペレットストーブを取り入れる施設も徐々に増えているそう。佐藤克哉さんは「南三陸が抱えている、防災やエネルギー、高齢化などの問題は、日本全体から比べると10年進行してしまっています。いわば課題先進地域。これからの日本のモデルケースになればいいと思います。」

た事業が、地元を根を張り、しっかりと動き出しているのを見られて、すごくよかったなと思います。」

最後に訪問した「南三陸さんさん商店街」では、化石のガチャガチャを発見したワッキーさん。さんさんマルシェの中村悦子店長に「歌津地区に、本業は漁師で、化石も発掘している方がいて、その人のアイデアで南三陸産の化石をガチャガチャにしたんです」と説明を受け、「漁師が採った化石なの!」と声を上げて笑うワッキーさん。2回挑戦し、2回とも二枚貝の化石をゲット。「ほら、この化石だって足元にあったものでしょ」と笑顔を見せてくれました。

まちレベルで実現する 資源の循環。

対談を終えたあと、一行は「南三陸町」の見学へ。「町内の小

中学生が社会科見学で来てくれることもあるんですよ。学校の授業で資源循環のことを取り上げていただけることも増えてきました。「南三陸町バイオマス産

業都市構想」が町のみなさんに浸透してきているな、とうれしく思っています。」

施設のそばに来て印象的だったのは、嫌な臭いがほとんどし

Visit
南三陸
 MINAMI SANRIKU

新しいものはいつも足元にある。掘り出された南三陸の魅力。

佐藤太一さんが管理する山で、合同会社MMRの面々。左からワッキーさん、佐藤太一さん、佐藤克哉さん、佐野薫さん。

ないこと。ワッキーさんは「こういう施設って臭いがあるイメージだったけど、ほとんど無臭!」と驚きの声を上げます。「バイオガスをつくる発酵の工程では、酸素を入れてはいけません。密閉してつくるので、臭いも漏れませんが」と野添さん。「分別した生ごみで、地元の農家さんの野菜が育てられ、食卓に上がる。ごみ出しをきっかけに交流が生まれ、資源循環を軸に、人同士の関係も紡がれていく。私たちが目指すのは、そんな循環の輪が広がる未来です。ワッキーさんも頷きます。「日本全体、世界全体でやるというワードルが高いと思うけど、自分たちのまちレベルでこういうことができるなら、真似したいと思う自治体もありそう。環境やコミュニティの問題は、自分たちの世代だけじゃなく、ぼくたちの子どもにも関係してくる



生ごみと汚泥を発酵させて作った液肥。作物の育ちがよいと評判。

世界に誇れる モデルケースに。

森・里・海・ひとが持続可能なまちで共生していくという「南三陸町バイオマス産業都市構想」には、アマタ(株)のほかにも様々な地元企業が参画しています。例えば戸倉地区では、

ことだから、今のうちにやっておけることを進めたいですね。」

海の資源を守りながら高品質の牡蠣をつくり、日本で初めて「ASC認証」※1を取得しました。森でも環境に配慮した取組が行われており、人と森が共生するための取組を実施しているとして、「ASC認証」※2を取得しています。

「ASC認証とFSC認証を同時に取得している地域は、世界でも珍しいんですよ。そう話してくれたのは、次に訪れた「合同会社MMR」の佐野薫さん。合同会社MMRは、林業をなりたいとする佐藤太一さん、運送業を営む佐藤克哉さん、土木会社を営む山内利也さんが2015年に設立した会社。南三陸産の木材を使った木質ペレットの開発



合同会社MMRが開発と普及に取り組む、南三陸産の木質ペレット。



管理が行き届いた森は、日光が入るため、下草が青々と生えるそう。



非常時に万能な備蓄下着セット

「当時の総務部長から「阪神・淡路大震災の時にいただいた恩を返してこい」と送り出された」と話すのは、兵庫県南部に位置する淡路島の洲本市から来た元木さんです。1995年に発生した阪神・淡路大震災当時、元木さんは1歳。震災の記憶はありませんが、周囲の大人から当時の状況を聞いたり、学校の授業で阪神・淡路大震災に関する施設を見学したり、震災の教訓を学びながら育ちました。元木さんが洲本市に入庁したのは、東日本大震災が発生した翌月の2011年4月。洲本市では、震災直後から南三陸町に職員を派遣しており、いつか支援に行きたいという想いは8年後に叶いました。

元木さんが南三陸町に来たのは2019年4月。1年目は保健福祉課で、被災者の応急仮設住宅の入退去などに関する業務を中心に、仮設住宅が解消してからは、建設課で住宅再建に係る助成事業を行っています。「住宅再建を補助金で支援するにあたり、申請書の書き方や用意するものを分かりやすくお伝えするようにしています。派遣職員だと分かれると、住民の

「レスキューランジェリー」は、ブラトップ、ショーツ、布ナプキン、洗剤が専用バッグに収められている非常時用備蓄下着セットです。災害時、支援物資として下着が届いたとしても、自分の身体に合うとは限りません。避難が長期化すれば臭いが気になるため、洗濯をしたいけれど、下着を干すことに抵抗がある。そんな災害時に直面する女性ならではの悩みに目を向け、そのニーズにきめ細かに応えているのが「レスキューランジェリー」です。

check! 02
女性
のニーズに
きめ細かに
対応

「主婦目線で色々な部分に目を向けて開発しました」と言う本間さん。下着の布地には竹の繊維を使用し、天然繊維のため敏感肌でも安心な上

NOW IS.
防災
BOSAI FRONT LINE
70.11.11

Vol.16

PROFILE
株式会社ファンクシオン
代表取締役社長
本間 麻衣さん



娘の「ブラジャーがほしい」という一言をきっかけに、子どもから大人までのランジェリーブランドで起業。その後、社会貢献と持続可能な事業に方向転換し、災害時に役立つ下着「レスキューランジェリー」の企画・開発・販売を行う。

みやぎ復興情報
ポータルサイトは
コチラから!

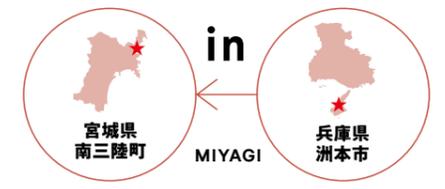
<https://www.fukkomiyaagi.jp>

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を開設しています! 復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取り組みなどを発信しています。

宮城県の東日本大震災死者数(関連死含む) 10,566人 | 行方不明者数 1,218人 | 2020年7月31日現在宮城県危機対策課調べ



活躍する応援職員 SUPPORT POWER



南三陸町 建設課 市街地整備係
もとぎ けんた
元木 健太 さん
兵庫県洲本市から南三陸町に派遣

「当時の総務部長から「阪神・淡路大震災の時にいただいた恩を返してこい」と送り出された」と話すのは、兵庫県南部に位置する淡路島の洲本市から来た元木さんです。1995年に発生した阪神・淡路大震災当時、元木さんは1歳。震災の記憶はありませんが、周囲の大人から当時の状況を聞いたり、学校の授業で阪神・淡路大震災に関する施設を見学したり、震災の教訓を学びながら育ちました。元木さんが洲本市に入庁したのは、東日本大震災が発生した翌月の2011年4月。洲本市では、震災直後から南三陸町に職員を派遣しており、いつか支援に行きたいという想いは8年後に叶いました。

元木さんが南三陸町に来たのは2019年4月。1年目は保健福祉課で、被災者の応急仮設住宅の入退去などに関する業務を中心に、仮設住宅が解消してからは、建設課で住宅再建に係る助成事業を行っています。「住宅再建を補助金で支援するにあたり、申請書の書き方や用意するものを分かりやすくお伝えするようにしています。派遣職員だと分かれると、住民の



元木さんが所属する建設課が整備する「南三陸町震災復興祈念公園」。一部開園している「祈りの丘」から見える町全体の景色が元木さんのお気に入り。公園は今年秋に全面オープン予定です。

「文化も気候も言葉も違う場所から来てくれて、応援してくれるのがうれしい」と言ってくださるんです。とてもやりがいを感じます」と元木さん。「実は、「被災者生活再建支援法」は、阪神・淡路大震災をきっかけに制定された法律です。大きな災害が起きると、様々な制度が見直されたり、新しくつくられたりしています。私が携わる業務は再建支援のほんの一部ですが、みなさんの明るい未来につながるお手伝いができたら」と元木さんの任期は2021年3月までの予定で、「任期まで、南三陸町でできることは全部やりつくしたいです。阪神・淡路大震災の時の恩返しができたと感じるよう、頑張りたいですね」。

INFORMATION from MIYAGI

- 01 震災復興ポスターを配布しています!
- 02 「宮城県震災復興パネル」の貸出について

宮城県の復興の「いま」をお伝えするとともに、復興の過程で得られた新たな「価値・教訓」を全国に発信するため、今もお復興に向けて取り組む方々の決意や想いを表したポスターを4種類作成しました。震災の記憶の風化防止や、防災・減災を目的とした掲出を行っていた方には無料でご提供いたします。



宮城の復興状況をまとめた「宮城県震災復興パネル」の貸出を行っています。防災等のイベントのほか、大勢の方がご覧になる場所で展示いただける場合には無料でお貸しします(送料は利用者負担)。全10枚のうち、枚数を指定した貸出も受け付けていますので、是非ご検討ください。

●仕様等
サイズ:A1、枚数:10枚、
貸出料:無料、送料:利用者負担

ポスターとパネルの詳細は
みやぎ復興情報ポータルサイトで検索



●県震災復興推進課
☎022-211-2408

Thank you from MIYAGI

宮城から、ありがとう。

全国各地、世界各国から寄せられた、たくさんの支援。
宮城の復興は、そんな数多の想いで成し遂げられています。

SUPPORT FILE
No.4

From 日本ユニセフ協会 To 南三陸町

あさひ幼稚園

宮城県の北東部に位置し、海・山・里の自然に恵まれた南三陸町。再建された南三陸町役場や南三陸病院などがある高台の志津川地区沼田は、町の中心となる地域。そこには町内唯一の幼稚園「あさひ幼稚園」があります。

あさひ幼稚園の旧園舎はJR志津川駅のそばにあり、東日本大震災の際、園児と職員は全員無事でしたが、園舎は津波で全壊。仮設園舎で運営をしていました。再建にあたり大きな力となったのは、日本ユニセフ協会。プロサッカー選手である長谷部誠さんが著書の

印税やチャリティイベントの収益などを日本ユニセフ協会へ寄付し、再建に充てられました。あさひ幼稚園の小島孝尋園長は、南三陸町内にある「大雄寺」の住職です。大雄寺は津波被害は免れましたが、寺の参道にある巨木の杉並木が被災。塩害で枯れてしまう運命にありました。その杉を再建する園舎に使用すると提案をしたのは、建築を手がけた手塚建築研究所でした。「あのまま朽ちて倒れるばかりかと思っていたので、園舎に使われてよかったです」と地域の人たちも喜んでくれました。

と小島園長は当時を振り返ります。2012年、木のぬくもりが感じられる園舎が完成。園周辺の山林で復興宅地の造成工事があったため、再び仮設園舎で運営を行いながらも、本格的な再開のために3棟を増築し、2016年に完成しました。

「300年以上にわたって寺を守ってきた杉が、姿を変え、命を巡り、今度は子どもたちを見守ってくれています」と穏やかな笑顔で話す小島園長。「この園舎でのびのびと学び、世界のために役立つ人に成長してもらえたら」。



1 全国の技術者と南三陸町の職人が知恵を絞り、建具、床材、ボルトに至るまで、手作業で木材が加工されています。2 外観は、「屋根のないお寺に見える」と言われるそう。3 大雄寺の住職でもある小島孝尋園長。4 余った端材でつくられたボールには長谷部選手のサインが。5 木のぬくもりを感じる保育室。

NOW IS. Vol.52

発行：2020年9月11日 宮城県震災復興本部（事務局：震災復興推進課）
〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号
Tel:022-211-2408 Fax:022-211-2493
『復興情報発信プロジェクト NOW IS.』は、宮城の復興の「いま」を伝えるプロジェクトです。

宮城県
Miyagi Prefectural Government